

〈博物館秋季企画展 仏教の歴史とアジアの文化〉

重要文化財『春記』と紙背聖教

—平安貴族の生活と信仰—

准教授 **東 館 紹 見**
(日本仏教史〈古代・中世〉)

2008年度の本学博物館秋季企画展(会期: 9月9日~27日)は、「重要文化財『春記』と紙背聖教—平安貴族の生活と信仰—」と題する、平安時代の貴族 藤原資房(1007~57)の日記『春記』とその紙背に記された真言密教に関する聖教についての展覧であった。本学所蔵の『春記』(1巻)には、記主の藤原資房が藏人頭への要職にあった長久2年(1042)2月の条文が記されており、後朱雀天皇の北野社への行幸や、仏師定朝への船の龍頭の製作依頼、政治家・学者として著名であった藤原公任の死去に関する記事など重要な記述が多いことで知られている。また同時に本文の裏側(紙背)に記された聖教も重要なもので、近年の研究により、この聖教が真言宗の学僧として著名な寛有の『顕密立教差別記』であることが判明し、その内容から、当時の真言宗の教学理解や天台宗との交流の姿などを詳しく知ることが可能となった。さらに注目されるのは、本学所蔵本『春記』とともに東寺に伝来した宮内庁書陵部所蔵本『春記』(8巻)と京都国立博物館所蔵本『春記』(3巻)のすべてに、本学所蔵本と同様に寛有の著述を主とする真言密教に関する聖教が記されている点である。紙背の聖教は、本文が筆写されてからそれほど時間を置かずには写されており、本文・紙背ともに平安時代末期の筆写にかかるものとみなされる。一連の日記の写本に、このように同じ系統の聖教がまとまって記される例は他に知られておらず、これらの事実は、東寺伝来の『春記』の成立事情や、当時の日記と聖教の関係など、重要な問題を考える鍵となるものとみなされる。

こうした興味深い事実を多く含む『春記』写本の内容と諸課題を共有し考察することを目指して、企画展会期中の9月13日には、関連したシンポジウムが開催された。

当日パネリストとして参加いただいたのは、京都国立博物館学芸課企画室研究員の羽田聡氏、大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏、種智院大学学長の頼富本宏氏であった。

まず羽田氏は、『春記』のさまざまな写本」と題する講演で、『春記』の諸写本を紹介された上で、東寺本『春記』の紙背に聖教が記されている点を重視され、本文と紙背の関係を考察することの重要性を指摘された。続いて宇都宮氏は、『春記』紙背に記された読み方の作法」と題して、当時の仏教各宗派におけるヲコト点使用のルールを紹介され、本学所蔵本のそれが、真言宗の仁和寺を中心とする当時の先進的な教学グループが使用した円堂点であることを指摘された。また氏は、当時の仁和寺の教学圏に属する僧侶たちと為政者である後白河院との関係についても言及され、彼ら僧侶が貴族社会で活動する際に知識の共有を必要としていた点から、『春記』本文が書写された理由についても発言された。最後に頼富氏は、『春記』の紙背に書かれた密教の教え—著者・寛有の仏教史上の位置—」と題する講演で、紙背聖教の著者寛有の著述に見られる教学的な特徴や、寛有の真言法流の中での位置づけについて述べられ、特に後白河院の皇子である仁和寺の守覚法親王の弟子たちとの関係に注目された。

引き続き行なわれたディスカッションでも、3氏の講演を受けて活発な質疑応答がな



シンポジウム風景

された。中でも、本文が現わす貴族の世界と紙背が示す仏教教学の世界をつなぐ接点として、寺院を中心とする人々の交流が改めてクローズアップされてきたことは、今回の企画展ならびにシンポジウムの大きな収穫であったといえるであろう。

歴史学・国語学・仏教学という異なる分野の交流による研究の成果が公開され、参観・来会された諸氏と共有できたことは大きな喜びであり、今後、一層の研究の深まりが期待された有意義な展覧・シンポジウムであった。